

“花と織部のエキシビション”から

水野幸爾

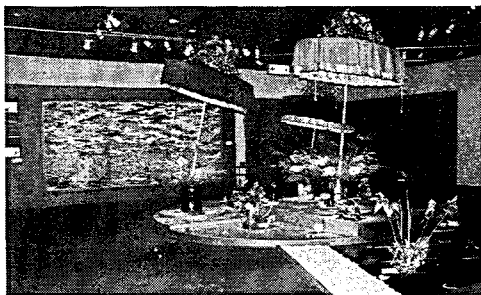


会場に入ると、藤のアーチが百本程、登窯のイメージでトンネルを形作っている。このアーチの内側に設けられた茶室風の空間に五島美術館蔵の織部の名品と

当館蔵品の器が数点、花をいけられて展示されている。トンネルを登りきるとUターンをして、トンネルの横を降りてくる。その作られた坂道の脇にも当館蔵の器が花とともに展示されている。8月20日から東京渋谷のBunkamuraで1月のロングランで始まった“花と織部のエキシビション”の会場の導入部である。つづいて、会場は広く展開され、小原流のいけ花と五島美術館の名品、それに当館蔵の二千余点の陶片等が競いあって全体を構成する。その素晴らしさに感嘆する。とりわけ、会場の中央部の側面に設けられた斜面に、直径4メートルの円があり、その円内にぎっしりと並べられた千点余の陶片は迫力があり、これを見て思わず拍手をする女性の団をみる事ができた。

この“花と織部のエキシビション”は、いけ花の小原流と五島美術館等の主催で、土岐市等の協力で開催されたものであり、この美術展に協力することで多くのことを学ぶことができた。今まで、二級三級の展示資料と考えていた陶片が、一級の展示資料であったということ、元屋敷窯跡出土の館蔵品が、五島美術館の名品と一緒に並べても遜色の無い実力を持った名品であること、又、花をいけて展示することによって、器の新しい魅力を発見することができ、今後の博物館展示の無限の可能性を知ることができたことである。

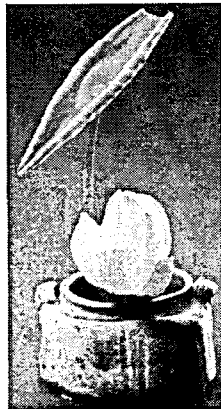
当館は県内の博物館等に比して、規模の小さ



な展示施設であるが、一方、十万余点の陶磁資料を蔵しており、これに加えて、埋蔵文化財の発掘も職分としてあり、このことが館蔵資料の充実につながる大きな力でもある。今回、学術資料として一級である陶片が、展示資料としても一級品であることを知り、歴史館機能の充実の責務を課せられた思いがする。

行政の大きな柱に文化行政を掲げる市は多いが、実際の施策となると、市民にアピールしやすい展示行事に厚く、文化行政の基礎的現場はかなり寒いのが常である。まして、陶片が文化であると考えすることは皆無に近い。それでも、桃山時代を振り返るのは、土岐市民として楽しい。縄文を除き日本の陶

磁史は海外の模倣の歴史であったが、美濃の桃山陶だけは、真の創造を展開したと言える。その中心にあったと考えることは誇らしいものである。職員には、この桃山陶を研究できる幸運と責任を自覚して仕事をして欲しいと思っている。それとともに、当館が美濃の桃山陶の学術センターとして成長していくことを願っている。(土岐市美濃陶磁歴史館長)



第61回公開講座報告

輪中と治水 — その過去・現在・未来 —

とき 平成6年8月18日
ところ 海津町文化センター
講師 伊藤安男 氏

今回の公開講座は花園大学文学部史学科の教授で、輪中研究の第一人者である伊藤先生にお願いしました。開催地海津町教育委員会のお骨おりで町民を主に76人の参加がありました。



◎講演要旨

1. 輪中とは

輪中については、小学校社会科や高等学校地理の教科書でいろいろな取扱いをしているが、「洪水から耕地や集落を防御するために周囲に堤防をめぐらし、そこをひとつの生活の単位として水防共同体を形成している地域」と定義づけできよう。明治20年代には、木曾三川流域に約80の輪中がみられ、愛知県の立田輪中から三重県の長島輪中まで岐阜・愛知・三重の東海三県にまたがっていた。東西約40km、南北約50kmの逆三角形をなし、面積約1800km²はほぼ大阪府と同じである。

輪中と同じような囲堤形態をもつものは、日本では利根川、淀川、九頭竜川等、外国では中国等に類似のものが分布するが、いずれも木曾三川流域とは比較にならないほどの小面積で、水防共同体として特異な社会構造をもつ地域を形成していない。この意味において、輪中地域は木曾三川流域にのみみられるものといつてよい。

2. 過去の治水…囲堤方式

輪中はまず、増水時における上流からの水の流入を防ぐために、耕地や集落の上流側に自然堤防や微高地をつないで築かれた。下流の方が

むかし いま これから

オープンになっている形態から尻無堤とか築捨馬蹄型輪中といわれている。

これでは水かさが増すと下流側から浸水するため、やがて下流側にも堤が築かれるようになる。これを逆水除（最下流域では潮除堤）という。こうして耕地や集落の周囲を連続した堤防が取り囲んだものを懸ヶ廻堤という。

輪中がはじめて形成されて以来、低湿地が次々と新田開発され、輪中は次第に増加・拡充していった。その一方で、洪水も次第に多く発生しだした。その原因としては次のことが考えられる。一つは、濃尾平野造盆地運動である。つまり、東部の名古屋や尾張丘陵、各務原台地が隆起し、西濃平野が沈降するという東高西低の地殻運動が、1000年に1.8mの割合で現在も進行中であり、明治24年の濃尾震災の前後では掛斐川左岸が約80cm沈降したのに対し、各務原台地は約77cmも隆起している。こうして、土地が沈降しつつある西濃平野で水量豊富な木曾三川が合流しているのであるから、洪水が多いのも道理である。

もう一つは、新田開発により今まで遊水地であったところに輪中が形成され、それまで縦横に濃尾平野を流れていた木曾三川の流れが狭められてしまったことである。その結果、輪中堤外に大量の土砂が堆積し輪中内より河床の方が次第に高くなったため、洪水が発生しやすく、被害も大きくなっていった。また、河床が高くなったため、自然排水能力が低下して湿田化が進行し、悪水停滞による作物の水腐れ等の被害も目立つようになった。このため、輪中特有の景観である堀田が出現するとともに、水論も激化することとなった。

3. 現在の治水…連続堤方式

徳川幕府は尾張藩の洪水防御のために、慶長14年(1609)大山から下流の祖父江、弥富(木曾川の左岸=尾張側)にいたる約50kmにわたる長大な堤防を築いた。この堤は御囲堤と称し、治水史上特筆すべき連続堤であるが、また、尾張藩の美濃側に対する差別的治水策そのものでもあった。「対岸美濃の諸堤は御囲堤より低きこ

と三尺たるべし」という尾張大事の政策により、この頃から美濃側の洪水が倍加していった。

その後、薩摩藩による宝暦治水工事が行われたが、根本的な治水対策としては明治の木曾三川分流改修工事をまつこととなる。明治政府のお雇い外国人であるオランダ人ヨハネス・デレーケは、木曾川改修計画をたて、養老断層崖下に巨石積砂防堰堤を築くなど近代的な治水政策を実施するとともに、明治20年から木曾三川の本格的な分流工事に着手した。この工事は、木曾三川を相互に結んでいた支派川を締切り、三川を海まで完全に分流するもので、輪中堤方式から連続堤方式に移行するものであった。この工事の結果、輪中地域の洪水は急速に減少し、輪中近代化への第一歩を歩むこととなった。

4. 未来の治水…総合治水方式

毎年5月10日から28日までが総合治水推進週



間と定められ、堤防強化だけでなく、河川の整備、水に強い町づくり、災害に対する準備等の総合的な対策が重視されるようになった。建設省では、地域住民の水防意識を高めるために水防訓練を盛んに実施し、水防に裏打ちされた治水対策を行っている。

(公開講座委員 野原 薫)

廣瀬 鎮先生を偲ぶ

元岐阜県博物館学芸部長 川崎 立夫



ありし日の廣瀬鎮氏

今年5月29日、あの元氣な廣瀬先生が幽明境を異にされた。痛惜の念に堪えない。先生は立命館の法学部の出身ではあったが、京大で世界的な霊長類学の大家今西錦司・宮地伝三郎先生らの薫陶を受けられてサルの研究に打ち込まれるようになった。日本モンキーセンターの設立と同時に学芸員、さらに学芸部長になられ、28年間サル学の普及は勿論のこと、多くの社会教育に貢献された後、名古屋学院大の教授として移られた。先生の博物館教育に対する学識と情熱は誰にも真似のできるものでなく、日本動物園教育研究会長・日本博物館学会運営委員・展示学会理事その他各地の博物館顧問・委員の「肩書き」が示すようにその道の泰斗であった。本県においても県博物館協会の設立(1966)の牽引力となり県下の多くの博物館が指導を受けた。一方先生独自の考えの

『ニホンザルを主題とした文化人類学』は人類学会その他で高い評価を得、その深い学識を基にした各所での講演の内容は実があり、面白く、極めて好評で人口に膾炙するものであった。

先生とおつき合いを始めたのは私がサルに興味を持ち始めた二十数年前に遡る。当時学芸部長であられた先生は「なんとしてもモンキーセンターをはじめとする動物園や博物館を有効な自然史教育の場にしたい」という熱情に駆られておられた。県教育センターで理科教育振興の至上命令に悩まされていた私は先生の仲間に入れて頂き、共同研究することとなった。後、博物館に在籍するようになって交流は益々頻度を高め、県博物館のあり方についても貴重な示唆を数多く戴いた。親切で人の依頼に決して「厭」と言わず、常に温顔で研究熱心、この高邁な人格は凡人の遠く及ぶところではなかった。今は「極楽」で自然と人文を有機的に繋げた独特の哲学を爽やかに話されていることであろうが、現世の我々にはもう聞くことはできない。残念でならない。唯ご冥福をお祈りするのみである。

東海地区博物館連絡協議会

地域における博物館の役割をテーマに交流



平成6年度東海地区博物館連絡協議会・日本博物館協会東海支部理事会及び総会が、6月16日17日の二日間、甲府市において開催された。総会出席者は、当番県山梨の33人を含め約百人を数え、本県からは、青木、横山両理事を始め12人が参加した。

開会の来賓祝辞で毛利日博協専務理事から、全国的に博物館施設は現在も増加しており、生涯学習社会に果たす期待は大きく、その充実のため学芸員の資質向上を中心に博物館法の改正の検討が進められているとの話があった。

本年度の表彰は、鎌倉国宝館館長三浦勝男氏が、館勤務はもとより、多数の著書執筆等で博物館界への貢献顕著でもって受賞された。

総会議事では、(1)理事の選任 (2)前年度事業、決算報告 (3)本年度事業計画、予算 (4)次年度開催県を協議し、提案どうり承認された。本年度予算は、各県3万円の負担金、日博協助成金、当番県市補助金等で収入892千円、支出は今回の会議、研修、施設見学の一連の事業費が大半を占めている。

この後、意見交換会に入り、「地域における博物館の役割」をテーマに、企業博物館の立場から川崎市にある東芝科学館、町村立施設として本県岩村町歴史資料館、都市立から浜松市美術館の三館から活動状況の報告を踏まえて提案がそれぞれあった。いずれも学校週五日制の実

施や生涯学習時代へ積極的に対応して地域社会の文化・教育活動の充実に役立つための博物館活動に工夫を重ね、参加体験型博物館を模索していることが窺われた。また、博物館相互の連携や学校、行政への働きかけ、ボランティアの活用等も必要であるとの意見があった。

なお、岩村町教育委員会柴田正樹氏には、意見提案を会前日に依頼したが、町村立資料館の先がけとして地域に根づいた着実な活動の実績があり、それを適切に紹介していただいた。

会場と宿舎がKKR甲府ニュー芙蓉となり、夜は当地特産のワインを酌み交わしての懇親会があり、参加者は実のある情報交換に時の経つのを惜しむようでもあった。

二日目は、午前中昭和53年開館以来、ミレーの美術館として一日平均1400人の入館者を数える山梨県立美術館と平成元年に隣接して開館した県立文学館を見学した。両館を中心に6haが芸術の森公園として整備され、自然と芸術・文芸を渾然一体として感得できる潤いの場となっている。午後は、水晶、印伝、ワインなど甲州の物産を展示する地場産業センターと武田信玄開基の善光寺を訪ねて、全日程が終了した。

(副会長、岐阜県博物館長 横山勢津男)

愛知県博物館協会 設立30周年を祝う

6月6日愛知県博物館協会は設立30周年記念式典を名古屋市の電気文化会館講堂で開催した。会長の山田敬二県陶磁資料館長の式辞、日博協毛利専務理事らの祝辞、功労者表彰などの式次第の後、川村恒明国立科学博物館長による「文化の時代と博物館」と題した記念講演が持たれた。本協会からは副会長横山県博物館長が式典に出席して祝意を表した。

飛驒古川まつり会館

〒509-42 吉城郡古川町一之町 14-5

TEL (0577)78-3511

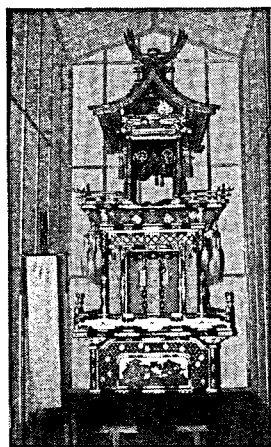


飛驒古川まつり会館は「古川の活性化」のために企画された「起し太鼓の里」構想の核施設として建設されました。

400余年の伝統をもつ古川祭は「動と静」を表わす祭ともいわれ、その「動」は、裸と裸の男がぶつかり合い、春を待ちわびたエネルギーが、一気に吹きだす勇壮な裸祭です。

古川祭のもうひとつの主役である「静」は、飛驒の匠の技術の粋を集めた絢爛豪華な「屋台」です。9台の「屋台」は祭の間、町内を曳き廻されて、子ども歌舞伎や糸からくりが演じられます。この会館は、このような生きている祭文化をベースに構成されています。

会館の構造等の特徴は、「普通的美術館・博物館はミイラを保存しているけれど、ここでは“生きた展示”を置いているんですよ。ですから建物は、展示物にとって一番いい状態に置いてあげないと。」と、本館の設計者である清家清氏のことばどおり、いろいろなところに特徴があります。



会館には、常時8台の屋台が展示されていますが、保存を前提にしてあるため、絢爛豪華に装備した屋台の布・装飾が色あせたり、万が一火災でもおきたらという配慮から、蔵の中には照明がまったく取り付けていないと。



屋台を展示期間中に修理したり、動いている状態をイメージするために、蔵の中をターンテーブル式にしてあること。また、「平成の屋台」の誕生を目標に、工房室や製作コーナーもあります。

外観は、周辺の飛驒建築になじませて、蔵が建物に埋め込まれたような形態をとり、館内は屋台の高さが7mを超えるため、周囲の寺院等を威圧しないように、下階は2m地下に沈め、又、床は断熱効果と木のやさしさを取り入れて木レンガが敷かれています。

当館のメインとして、勇壮な「古川やんちゃ」が奏でる起し太鼓を、6面の大型スクリーンと音響システムを駆使し、立体映像で祭の生の臨場感が味わえることや、コンピューター制御によるからくり人形の実演、伝統工芸の切り絵・一刀彫りの実演、「平成の見送り」等の絵画、祭文化の古文書など貴重な資料も展示してあります。

◇交通 JR飛驒古川駅より徒歩7分

◇開館時間 午前9時～午後5時

◇入館料 大人800円 高校生700円
小中学生400円

(団体は20名以上各10%引き)

◇休館日 毎週木曜日

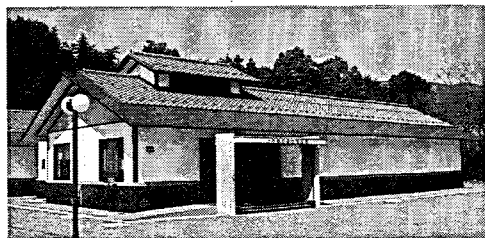
12月28日～1月2日

(飛驒古川まつり会館長 打田清徳)

上石津町郷土資料館

〒503-16 養老郡上石津町大字宮 237-1

TEL 0584-45-3639

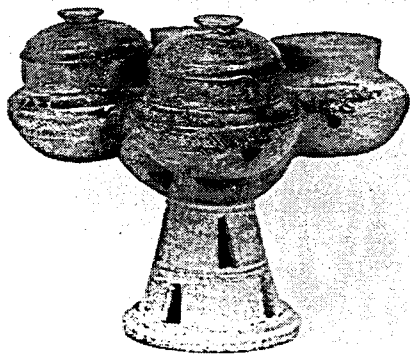


鈴鹿・養老の山々に囲まれたここ多良の地、江戸期を通じて木曾三川の水行奉行を勤めた旗本（交代寄合美濃衆）西高木家陣屋跡地に上石津町郷土資料館が昨年5月にオープンしました。

この資料館は百数十名の会員を持つ上石津町文化財保護協会が中心となり、失われゆく史資料の蒐集を平成二年度より始め、町内はもとより多くの人々の理解と協力によって、建設の運びとなったものです。館内は四室に分かれ常時千点余の資料を展示公開しています。

歴史・民俗展示室

私たちの郷土は遠いむかしから「隠れ里」として数々の歴史を秘めてきました。縄文時代の遺物としては一万年もむかしの「木葉形尖頭器」をはじめ数多くの石器が出土し、古墳時代では南宮山南麓に点在する「牧田古墳群」（6世紀～7世紀後半）より出土した「須恵器裝飾壺」などの土器や鉄鏃などを展示しています。また歴史コーナーでは在郷旗本西高木家の「陣屋模型」や関連資料を展示しています。尚この室の



一画、民俗コーナーでは「むかしの農家の台所」を再現し山深い里にあって懸命に生き抜いてきた先人の暮らしを紹介しています。

収蔵展示室

衣食住の生活用具をはじめ生産生業・社会生活等、全般にわたって先人の使用したものを展示しました。むかしの人の生活の知恵やたゆまぬ労苦の跡を用具の変遷と共に偲ぶことができます。特設コーナーでは、種播きから収穫までの過程を追って農機具類を展示しました。

自然展示室

ここでは200万年のむかし東海湖の一部となっていた郷土の変動の過程を岩石や化石それに地層・地質などから知ることができます。

上石津町は88%が山林で、何といっても自然が一ぱいです。そこで町内に生息する動物をはじめ各種の生物も多く、その標本を展示しましたのでそれぞれの生態を知ることができます。



学習室

資料館に集められた資料を活用しての学習はもとより、多目的学習の場として利用することができます。また町内に自生する可憐な山野草の生態をカラー撮影し、スライドによって紹介しています。

歴史のゆかりも深い静かな高台、豊かな自然に囲まれた当館へ是非お越し下さい。

◇交通 ・JR大垣駅下車 バス1時間

・JR関ヶ原駅下車 バス30分

◇開館時間 午前9時30分～午後4時30分

◇入館料 大人100円 小人50円

（団体割引あり）

◇休館日 毎週火曜日

毎月第1、第3土・日曜日、祝日

12月28日～1月4日

（上石津町郷土資料館長 辻下栄一）